
想い

ノダメ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

想い

【Zコード】

Z5214F

【作者名】

ノダメ

【あらすじ】

高校生の里花は、いつもベランダにいた彼を見つめていました。
その彼は、親友の好きな人でした。

第一話 悲しみ（前書き）

高校生の時に経験するような恋愛に挑戦してみました。

第1話 悲しみ

彼はいつも、学校の光のあたるベランダにいた。
授業の合間の休み時間をそこで仲間達とすごしていました。

私は、ただその彼を見つめていた。

（ただそれだけで幸せで何もいらない。ほんとに？）
そう自分に問いかけていた時。

「ねえ里花、相談があるんだけど。」

後の席にいる親友の恵が声をかけてきた。

その時、予鈴がなつてしまつた。

こういう時は、授業中にいつもやる手紙のやり取りで話を聞く。
恵の相談は、好きな人ができたけど話かけられないといといいう悩み

だつた。

そして、私は男子と話すのが苦手なのに。

「私が一緒にいって、仲とりもつてあげるよ。」

親友の前だと見栄をはつてしまつ。

昼休みにその好きな人を見に行くことになつた。

昼休みになり、ドキドキだった私の心は砕けそうになつた。
恵の好きな人は、私の好きなベランダの彼だつた。

第1話 悲しみ（後書き）

読んでくれた方、ありがとうございました。

第2話 挑戦（前書き）

親友と同じ人を好きになってしまった里花。一人のなかをとりもつ約束までしてしまい・・・。

第2話 挑戦

下校時間に、恵をつれた私は、廊下にいた彼に思いきり声をかけた。

「若澤くん、今度のお祭りにみんなで行くんだけど一緒に行かない？」

（バカバカ、何を言つてるの私。恵と一人で行くのにみんなつてだれよ。

初対面で何が祭よ、普通行かないよ。）

「別にいいよ。」

「えっ？」

心の中で、頭を抱えていた私は、思わず彼の返事を聞き逃してしまった。

「だから、一緒に行つてもいいよ。祭か、お前も行く？」

彼の言葉に、跳びはねるような想いでいっぽいで、祭に彼の友達も行く事も一人の中をとりもつことも忘れてしました。

そして、家に帰つてもその気持ちはおさまることはなく眠ってしまいました。

そしてその夜、彼と二人でお祭りに行く夢を見ました。

朝、今日は待ちに待つたお祭りの日。

夜に備えて、お昼から恵の家で浴衣の着付け、メイク、ああでもないこうでもないといろんな会話のシチュエーションを一人で考えました。

決戦の夜、お祭の近くにある川の橋で待ち合わせ。

私達はすこし遅れて橋に行くと、浴衣姿の彼と友達の鈴木君がいました。

「おお、浴衣可愛いね。

なあ、お前もそう思わない？」

鈴木君の問いかけに

「ああ

彼は、私達に無関心でお祭りの提灯並びに目を奪われていました。
(ちょっとは、見てほしいな。)

そして、私は彼の隣に恵をいかせると鈴木君と一人の後につきました。

こうして、四人のお祭りが始まりました。

第2話 挑戦（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

第3話 一人

太鼓の音、陽気な音色をかなでる笛の音。

私には、聞こえなかつた。前を歩く一人を見ているのがつらかつたから。

周りの風景が灰色に見えた。私に一人を応援できるのかな？

無理なのに、なんで私は一人に笑顔を向けるのかな？

その時、ドーンドーンと花火の音がした。

空を見上げると、花火が綺麗に夜空に咲いた。

悲しくはかない花火に見えた私の目に一粒の涙が流れた。

「感動しそぎ？」

鈴木君の言葉に我に返つた。

「ちがうちがうなんか、目が痛くて。」

我ながら下手な嘘だけど、私の気持ちに気づかなければ、それでいい。

慣れない下駄にそろそろ限界になつてきたし、早く帰りたい。

「花火終わつたし、そろそろ解散しよう。」

鈴木君の言葉で解散になり、私たちはそれぞれの方向に別れた。

彼は、恵と同じ方向だから、今頃お祭りの思い出話に華が咲いているのかな。

そんなことばかり考えていると、自然に涙が流れその場に立ち止まつていきました。

「そんなに痛いの？」

「彼が目の前にいた。

「なんでここにいるの？」

私の問いかけを聞かずに彼はかがんで背中をむけた。

「いいから、乗つて。」

「わけがわからない。」

「いいよ。恥ずかしいし私、重いし、疲れちゃうよ」

痛いけど、無理だよ。

「いいから、乗れ。」

私は、彼の背中に乗った。

「ありがとう。」

彼は、何も言いませんでした。

河川敷の淡い祭り提灯の光を浴びながら、私は、彼の背中に顔をうずめて泣いてしまった。

そして、家の前についても彼は何もいわずに帰つていった。

今日の出来事は、私の中の宝物で秘密。

それ以来、彼となにがあることもない。

思えば、私の恋はあの夏で止まった間々、時は過ぎてしまった。

高校卒業。私は、彼にも親友の恵にも気持ち告げることとは、ありませんでした。

新しい生活、もう楽しい仲間に囲まれた学校生活や彼のいるテラスに足を運ぶこともない。

高校の頃に想い描いていた大人は、もつとかっこいい仕事をして東京で彼氏もいて、その次は結婚。単純だ。

現実の私は、結局地元でバイト生活だ。

私のバイト歴は、高校の頃からだから、かなり長い。

だから平氣でバイトの後輩に「恋をするのは、簡単だよ。彼氏も簡単にできるよ。」なんて言えてしまふ。

自分は、好きな人をひきずつた間々でなおかつ彼氏なんて、できた事がこの19年で一度もないのだ。

でも、バイトの後輩たちは私に彼氏の相談を話していく。

その答えを見つけるために、私は雑誌や女友達、先輩から聞いた話をあたかも自分におこつたよう話すのだ。

最低かもしれない、しかたない、これは、これで苦労している。

いつも、感情の戦いだ。

気持ちが一杯になつたその日、バイトでミスをたくさん起こしてあがつた私に先輩がドライブに誘つてくれた。

深夜1時の湘南平、夜の海に月の光がさして、町の光がとても綺麗で自然と涙がこぼれた。

先輩が頭をなでてくれた。

「あんま、無理すんな。」

先輩とは、中学から一緒だけ話したことなかつた。バイトで再会してから、話すようになつただけ

なのに先輩には、いつもばれてしまう。

「大丈夫です。ありがとうございます。」

笑顔をむけた先輩が笑つた。

「ああ、横にいるのがみかちゃんならよかつたのにな。」

こういう人だ、みかちゃんはバイト先のかわいい高校生でしかも先輩には遠距離の彼女がいる。

だから、好きにはなつていけない人だ。

でも、私にとつての兄のようで安心できる人だ。

今日のこの月に、恋ができますようにと願つた。

高校卒業してから、二年たつて私は、二十歳になつた。

そのころから、バイトの飲み会に積極的に参加しました。

バイトの飲み会は、おきまりコースだ。まず、飲み屋からはじまり、二軒目かもしくは、カラオケ、そ

のあとは、バイト先に帰り解散。

その日の、飲み会もおきまりコースで私は飲みすぎて、ふらふらだった。

カラオケの途中で一人外にぬけだして、バイト先に電話を掛けた。社員がいないか確認するため

その時、何かが覆いかぶさつた。唇に感触を感じた。

バイトのOBの先輩だった。何が起ったのかわからない、心の整理ができずに混乱していた。

何も、知らないバイト仲間たちがカラオケを終えて出てきた。だれも、きづいていない。

一気に酔いが醒めてしまった。（酔った勢いでされたんだから、忘れよう。）

何日間か、忘れようと頭に映像が常に流れています。やつと、忘れかけたころにその先輩がまた酔っ払いながら、店に来た。

来るの、しようがない私の師匠である先輩と仲が良かつたからだ。私は、気まずかったので裏にある更衣室にユニホームを入れにいった。

ドアの向こうから、声がしてきた。

「ねえ俺、酔つてたけど忘れてないよ。」

その時、ドアがバンと開いて先輩に引き寄せられた私は、また唇を奪われていた。

その後、キスをすることはなかつたが会つと、ビキニが止まらなかつた。高校の頃の気持ちとは、ちよつとちがう。私は、その気持ちが確かめるために思い切つて、OBの先輩に「好きかも知れません。」とそのままの気持ちを告白した。

「バイトの後輩と付き合つ気ない。」

見事に失恋した。でも、心は傷ついていないむしろすつきりしていた。

ただ、キスをしてビキニをしただけで好きという感情は、なかつたようだ。

恋をするのに、いつからがあせつっていたのかもしれない。

そして、その日から飲み会の参加を減らした。ゆっくりい恋を探そう。

第3話 一人（後書き）

次回は、最終回です。お待たせしてすいません

最終回 想い

バイトの飲み会を減らしてから、私は学生時代の友達と飲むようになっていた。

思い出話に花が咲いていた、話題は高校の頃の恋話。

ただ、自分たちの恋話では、なく同級生のだれとだれが付き合っていとか、そんな話を懐かしげに話す。でも、みんなの心の中は、その時の彼氏や好きな人を思い浮かべているのかもしれない。

私の心中にも、彼がいる。（まだ、いる？）そう、心に問いかける。

「ねえ里花は、だれか好きな人いた？」

なんでも、知りたがりの亜美だ。

「うーん、いたけど秘密。」

何年もたつた今でも、恵の前では、言えない。

恵は、高校の頃、私とちがつて彼にちゃんと気持ちをぶつけていた。その恋は、実らなかつたが、彼女は新しい恋を見つけて今度結婚する。

みんなと別れたあと、私は恵と一人でバーで飲み直した。ジャズと薄暗い雰囲気のバーは、この雰囲気だけで酔えるような気がする。

「里花、好きな人って岩澤くんでしょう？」

私は、唖然とした。

「なんで、わかつたの？」

恵は、心配そうに私を見つめていた。

「なんとなく。今でも引きずってるでしょう？」

私は、うなづくことしかできなかつた。

付き合いの長い恵を鈍感だと思っていた。

鈍感は、私だ。

そして、その夜は、カクテルを飲んで酔いしれた。恵と何かを約束した気がするけど、わからない。

この酔いに、この恥ずかしさを忘れない。

月に新しい恋を願ったあの日から、どれくらい経ったのだろう。

今日は、あの夏の日を思いながら祭りに行こうと思う。

昔と違う、とびきりの大人なっぽいメイクに渋めの浴衣。一人で彼におぶられたあの道を祭り会場の方へと歩いた。

卒業前まで、また会えないかと来るかもわからない彼を待つために、この道に通っていた。

祭りの提灯の灯りがその時の気持ちを思いだせる。

（あの時、何時間も待っていた私はまだ彼を待つて居るのかな？）
（待っていても、彼が来るはずないか。）

祭り会場についてから、屋台の見ながら周りのカップルや家族を見た。幸せそう。

とりあえず、友達がいたらできないことをやってみることにした。ビールを片手にイカの丸焼きにかぶりつく。

大人になつたら、やつてみたかった。いつも、友達の前では着飾ってしまうからできなかつた。

気持ちがいい、でも一人の祭りは寂しい。

祭会場をひと回りして、帰ることにした。

帰りの道も、あの道を通つた。昔どちがつて、一人歩く、でも一つだけ同じことが起こつた。

やっぱり、下駄は履きなれない。

「痛い。」

私は、その場にしゃがみこんでしまつた。

「大丈夫ですか？」

しゃがみこんでいた私に男の人が、足に絆創膏を張つてくれた。

「あつ。」

お互にだれか、わかつた。彼だつた。

彼が私の前にしゃがんだ。

「ほら。」

昔と同じ彼は、やさしい。

「いいよ。恥ずかしい。」

気持ちが思い出せる、忘れたことがない。

「初めてじゃないだろ。いいから乗つて。」

私は、彼の背中に乗つた。

なんだか、おかしくなってきた。あんなに会いたかった彼がいる。会いたいときに、会えなかつたのに会えないと思つた時に会えるなんて、変な奇跡。

心臓がどきどきする、熱い。

大人になつても、緊張する。

言葉がでない。彼にあつたら、いいたいことはいつぱいあつたのに。「あのさ昔、俺、この道をさけて通つてた。友達におまえが待つてる、冷やかされて。好きな子を待たせるつて最低だよな。今も引きずつてる。里花が今でも好きです。」

彼の言葉に、私は泣いた。

「私もずっと引きずつてた。ずっと気持ち言えなくて、あなたに会いたかつた。あなたが好きです。」

涙が止まらない。

「泣き虫。」

彼は、優しく笑顔で私の頭をなでてくれた。

二人で、卒業してから遠回り、今度は、二人でこの道を通りたい。待つのは、終わり。

終

最終回 想い（後書き）

最後まで読んでくれたありがとうございました（――）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5214f/>

想い

2010年10月31日14時18分発行